

「構造分析」理論の紹介(2):
摂食障害事例の投映法検査統合解釈から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000423

「構造分析」理論の紹介 (2)

—摂食障害事例の投映法検査統合解釈から—

佐々木 裕 子

I. 序

投映法のための人格論ともいえる「構造分析」(Wagner, 1971) 理論を紹介するにあたり、既に佐々木 (2000) においてその基本仮説である外面自己 (FS) と内面自己 (IS) の概要¹、及び本理論を用いた投映法解釈の例として「ハンドテスト」解釈を紹介した。そこで本論では、さらに構造分析が投映法検査を統合的に解釈する際にどのように役立てられるかについて紹介したい。

一般に投映法検査は、“非構造的な(曖昧な)刺激を提示し、その反応から個人の内に感情、欲求や思考などを捉える検査”とされている。しかしながら、精神分析理論でいう“投影”との混同から、無意識の欲求や受け入れがたい感情といった面のみが強調され、その結果、投映法は無意識レベルを捉える検査と位置づけられてきた。しかし、「非構造的な刺激」に対する反応がすべて無意識の産物であるというのは無理があり、むしろ被検者独自の統覚や体験様式が被検者の意図とは無関係に映し出されたものであるという方が適切であるといえよう。その意味からいうと池田 (1995) が指摘するように、「投映法とは、

1 外面自己 (FS: ファサード・セルフ) とは、人格の表層部分、「態度や行動傾向についての階層的に組織化されたまとまり (organized set)」であるとされている。これは、観察可能な表に現れた (外顯的な) その人の特徴であり、その人が他者や環境に対してどのように接し、どのように振る舞うかといった“外界への態度”であり、その人が日常生活をどのように生き、自分の周りの世界や環境をどのように体験しているかという“原型的な体験様式”，もしくは、外界に対する基本的な“構え”であるといえよう。一方、内面自己 (IS: イントロスペクティブ・セルフ) とは、人格の内層部分、「全人格の複雑さや深さ、特異性を生み出す」ものとされ、「FS の操作に対する気づきから発展した同一性の感覚に由来し、道徳的な判断や個人的な願望、生活スタイルや常識、世界に対する一般的で哲学的な見解などへと発展していく」ものとされている。つまり、外面自己 (FS) が“生きている”体験の基礎であり、それを認識し、統合するのが内面自己 (IS) である。我々は、外面自己 (FS) と内面自己 (IS) の相互作用によって“生きている”体験を経験することが可能となると考えられる。

新奇で、通常の意味では一義的でない不明瞭な刺激を提示し、それに対する自由度の高い反応を求めることによって、もっともその人らしいありようを表出させ、それを通してその人個人を解釈的に理解しようとする方法である」と定義する方が理にかなっていると考えられる。

従って、投映法の反応には被検者特有の体験様式が、刺激－反射といった自動化されたレベルのものから、抑圧された感情のような無意識のレベルのものまで、また、生活習慣のような日常的・具体的なレベルのものから、価値観や信念といった観念的なレベルのものまで、意識・無意識の違いに関係なく幅広く映し出されているということが可能である。このように考えると、投映法（曖昧な刺激に対する反応を捉える検査）として一括りにされている検査でも、それぞれが異なった人格のレベル（側面）を反映する質の異なる検査法であると考えることができるのではなかろうか。

しかも、本来心理検査は、それぞれが独自の人格論に基づいて作成されているため、各検査が焦点を当てている心理的要素は検査によって異なるはずである。そのため、当然1つの検査だけで被検者の全人格をアセスメントすることは不可能であり、必然的に複数の心理検査法からなるテスト・バッテリーを組むことになる。しかし、これまでの人格論は、その人格論を基にして作成された検査結果を解釈するための説明はされていても、他の検査から得られた結果についてどう理解するかについてまで触れられてはいなかった。つまり、複数の心理検査がお互いどのような関係にあるかを説明するような理論的考察はされていなかったのである。Wagner (1971) が指摘しているように「包括的な人格理論がない」のである。

こうした心理検査による人格アセスメントの穴を埋めるのが構造分析である。テスト・バッテリーの統合解釈において最初に必要となるのは、各検査が人格のどの側面に焦点を当てているか、もしくは、人格のどのレベルを反映しているのかを説明する概念であろう。構造分析は、人格を外面自己 (FS) と内面自己 (IS) の二大構造から説明し、これをベースにすることで、様々な心理検査法が人格のどの構成物を捉えているかについて説明している。つまり、テスト・バッテリーの統合に必要な心理検査間の関係（人格上の位置づけ）について、その基礎的な理論枠を提供しているのである。従って、構造分析の視点から心理検査法を捉え直すことで、各検査の結果を被検者の全人格の中に位置づけて理解することが可能となり、全人格的なアセスメントへと導くことができるのである。

そこで本論では、前稿に引き続き Wagner (1971) の “Structural Analysis: A Theory of Personality Based on Projective Techniques” を中心に、構造分析による投射法理解について紹介したい。その上で、ある摂食障害患者のハンドテストとロールシャッハ法の統合解釈を試みた。ハンドテストとロールシャッハ法は、それぞれが異なった人格構造部分に焦点を当てていることから、統合解釈に最も適した組み合わせとされている (Greene, 1978)。この2つの検査が、構造分析に基づいてどのように解釈され、被検者の全人格の中にどのように統合することが可能であるかについて検討したい。

II. 構造分析による投射法解釈

(1) 構造分析と心理検査法

構造分析は、人格を FS と IS の相互作用として理解するのであるが、この FS と IS は、それぞれが独立した構造でもあることが仮定されている。実際我々は、自己の内的体験と表に表れた行動とが、必ずしも一致していないことを日常的な経験から了解しているのではなかろうか。それほど明確に意識していなくても自然に口をついて出てくるお世辞や謙遜など、多くの人が体験していることであろう。また、人の良い社交的な人として周りから認知されている人が、強い対人不信を抱いていたりすることも想像に難くない。このように我々は、自己の内的世界とは異なる次元で、これまでに学習し獲得してきた外界に対する態度や構えを形成しているのである。それは自動化された反応様式でもあり、行動パターンや社会的スキルといわれるものでもあると考えられる。内的体験は当然これらに影響され、また影響もするはずであるが、しかし、それらは各々が独立した体験であると考えられる。

Wagner は、様々な心理検査法が、こうした内的体験 (IS) から外界に対する態度や構え (FS) までの一連の構造の、ある領域を捉えていると仮定した。とりわけ投射法については、「投影法を FS から IS への連続線上の位置もしくは“レベル”を意味するものとして理解する」(Wagner, 1976) とされており、同じ投射法でも捉える人格のレベルに違いがあるとされている。そこで、構造分析による心理検査法の位置づけについて、その概要を紹介したい。

心理検査法を FS と IS 構造に位置づけるに当たって、まず FS と IS がともに、「知性 intellect」と「情緒 emotion」のモダリティを通して活性化される」(Wagner, 1976) ことを紹介する必要がある。構造分析では、知性と情緒、そして行動

の3つのパラメーターが人格の幅を構成し、これらは人格の深さ（レベル）を意味するFSとISを活性化する。そして、FSとISからなる人格は、知覚運動スクリーン（PMS）を通して環境と交流するとされている。人格は知性や情緒によって活性化された理想やファンタジーなど、ほとんど行動としては表れないようなISから、実際の行動として表れるFSまでの力動的な連続体として概観することができる。そして、様々な心理検査法はその検査が人格のどの側面（知性、情緒、行動）に焦点を当てているか概念化することで、この人格構造の中に位置づけることが可能なのである。これらの関係を図示したものが Fig.1（Wagner, 1976 参照）である。

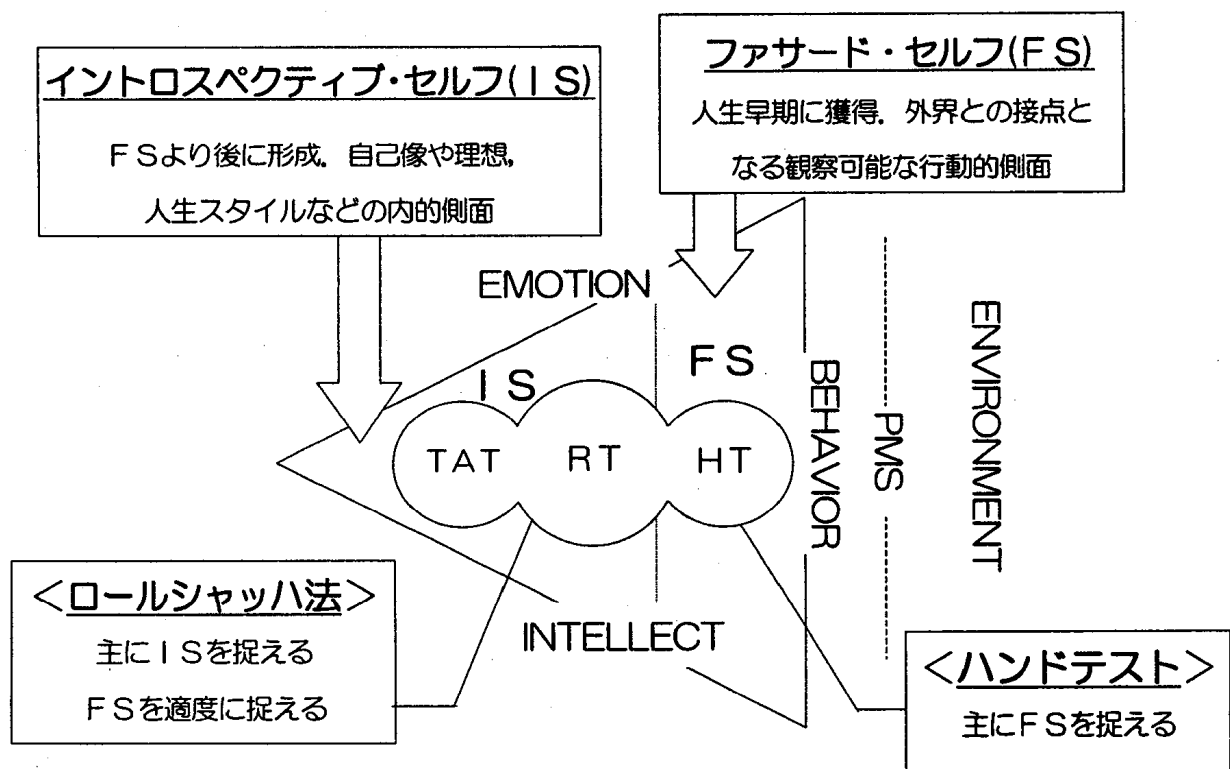


Fig.1 構造分析による投射法の位置づけ (Wagner, 1976 参照)

まず、客観的な人格検査については、「知性として示されるラインに沿った領域」(Wagner, 1976)に位置するとされている。これは、多くの質問紙法による性格検査が知的な判断に基づいて行われることを考えると、“知性”の領域に位置することは十分了解できるであろう。これに対して投射法は、「知性と情緒のベクトルから生じる幅をもったある仮説的な領域をカバー」(Wagner, 1976)しているとされている。つまり、知性と情緒の融合した複雑な体験を反映していると考えられる。ただし、先に述べたように同じ投射法でもそれぞれの検査が、

IS から FS までの異なるレベルに位置づけられている。

代表的な投映法であるロールシャッハ法は、他のどの検査よりも幅広い人格の様々な領域をカバーしている検査であるとされる (Wagner, 1976)。Wagner による他の検査との比較によると、ロールシャッハ法は、知覚運動スクリーンを捉えることにおいてのみ“弱い poor”が、FS は“適度 fair”に捉え、IS は“良く good”捉えているとしている。また、知性と情緒の幅に関しても“良く good”捉えているとしている。このことは、ロールシャッハ法の解釈において非常に重要な意味を持つ決定因に象徴されている。様々な決定因は、様々な心的機能を表していると考えられ、これらは FS と IS の幅広い領域に渡っている。

これに対して、ハンドテストは、知性と情緒は“良く good”捉えているが、深さに関しては、FS のみを“良く good”捉える検査とされ、IS や知覚運動スクリーンに関しては“弱い poor”検査とされている。このことは、Wagner (1983, 山上他訳, 2000) が「ハンドテストは、他の診断アセスメント用具と組み合わせて使うようにデザインされている」として、ハンドテストの限界を指摘していることにもつながると思われる。

その他、文章完成法 (Rotter's Incomplete Sentences Blank) は、FS を“良く good”捉えるが、知覚運動スクリーンや IS も“適度 fair”に捉えているとされ、TAT (Thematic Apperception Test) は、IS のみ“良く good”捉えるとされている。また、描画法に関しては、Wagner は人物画法に関して、知覚運動スクリーンと FS を“良く good”捉えているとしているが、山上 (1993) は、風景構成法とスクイグルを比較し、「風景構成法は全体のまとめ方やアイテムの了解性など主に FS 側面が関わっている」とし、「スクイグルは IS がより多く関わっている」と指摘している。このように、投映法に関しては、それぞれの検査のもつ特徴 (刺激の曖昧さや特質、また施行法など) によって捉える人格の深さは異なっていることが、構造分析理論においては明確に示すことが可能なのである。

(2) 構造分析と Rorschach 法

様々な投映法検査が、構造分析の枠組みを用いることによって無理なく人格構造に位置づけられることを紹介したが、ここではさらに、代表的な投映法であるロールシャッハ法が、構造分析による人格理解によって、どのように説明されるかについて紹介したい。Wagner (1971) は、ロールシャッハ法の決定因

が、これまでの理解と矛盾することなく、構造分析の枠組みでも理解され得るとしている。

まず、純粹形態反応 F は、図版の実際の形に基づいた判断であることから、現実に対する客観的で冷静な対処の指標とされている。構造分析では、「この定義を厳密にし、F が“外的現実”に方向付けられており、そのために毎日の対人的やりとりを処理することのできるファサードが存在していることを意味する」としている。ただし、当然のことながら、F 反応は単に環境に対する適応性を反映しているだけであるため、この F 反応によって「FS を構成している対人関係的傾向について正確に特徴づけることはできない」のである。実際、Rorschach 法において対人関係的特徴を解釈する際には、運動反応 (M, FM, m) を用いるのが一般的であろう。

しかしながら、構造分析において運動反応 (M, FM, m) は、「実際の行動としては表れない IS 過程を表している」とされる。これは、「M が空想上の産物を反映している」という Rorschach (1921) の仮説と一致する見解のようであるが、Wagner はむしろ運動反応についての意味を Piotrowski (1957) の「M が生活における原型的な役割」を反映するとする説 (上芝訳, 1980) に依拠している。つまり、「人間運動反応 M は、ある人生役割についての概念を表しているが、しかし、その役割の行動化は、その生体の心理的統合性に依存している」(Wagner, 1971) というのである。従って、「IS 傾向が空想の中に追い払われているか」(M 反応が実際の行動としては表れない IS 過程における観念的な人生役割を表しているのか)、それとも「不安や実際の行動に表れるのか」(M 反応に示された人生役割が、FS の領域にまで浸透しているものなのか) について、「IS と FS の力動的な相互関係を見極める」必要があるというのである。

その上で構造分析では、運動反応を次のように定義している。

1. 人間運動反応 M : IS 傾向のうちの人生におけるその人の役割に関する概念を明らかにし、その人の想像性や計画性、内的生活に関する能力を反映する。
2. 動物運動反応 FM : IS 傾向のうちの M よりもより発達的に早期に獲得した人生役割を表す。それはたいてい原始的で未熟なものであるため、意識の低下した状態か社会的抑制の少ない状況で表れやすい。
3. 無生物運動反応 m : IS 傾向のうちの確かではあるが受け入れ難いと主観的に認知されている潜在的な行動を意味す

る。無生物運動反応もまた平均以上の知能、内省力、秘めた欲求不満の感覚を意味している。

(Wagner, 1971)

これに対して色彩反応は、一般に感情や情緒性を意味するとされ、環境に対する反応性として解釈されているが、構造分析においても同様に理解されている。「色彩は、構造分析の枠でいうと情緒を意味しており、それは環境によって誘発されるものであり、FSを通して体験される」とされる。動いていない図版に運動を知覚する運動反応とは異なり、現実には描かれている色に基づいていることを考えると、色彩反応が外的世界に対する指向性を反映していることは十分了解できるであろう。このことから、構造分析では「体験型 (M: Σ C) は、まさに『体験のタイプ』を示しているものであり、M 優位の人は IS を通して『内的に』自らの情緒を表現しようとするのであるが、一方、色彩優位の人は FS を媒介して環境に対して情緒的に反応しているのである」としている。このように Rorschach 法の解釈の中心をなす体験型に関する構造分析における理解は、これまでの Rorschach 解釈に無理なく組み込めるものである。

また、陰影や濃淡反応についても、従来の Rorschach 解釈を歪めることなく構造分析の枠組みで理解できることが示されている。構造分析による理解を付け加えるとするならば、「陰影 (Dark shading) は、(略) 不安や抑うつ、同時に報復的な行動を意味する」とされ、実際の行動として表現され得る可能性を持った不安や抑うつ感などを意味すると考えられよう。さらに、濃淡反応 (light shading) に関しては、「環境による制約に直面して FS 傾向をうまく表現できないことを反映している」とされている。従って、構造分析ではこれら陰影や濃淡を、情緒的体験と実際の行動との間の関係を反映する指標として理解する視点が付け加えられていると考えられる。

(3) 構造分析とハンドテスト

IS から FS までの幅広い領域をカバーしているロールシャッハ法と比較して、ハンドテストは FS 領域を捉える検査とされている。これは、ハンドテスト開発の根本的な目的でもあった。ハンドテストは、「表面に表れやすい態度や行動傾向を映し出し、その人の行動を明らかにする投影法」(Wagner, 1983: 山上他訳, 2000) として開発されたのである。従って、ハンドテストはまさしく FS - 現実との接点であり、外的世界に対して示す学習された態度や行動パターンを構成

する人格領域—に焦点を当てた投映法といえよう。

ハンドテストが、FS—人格の表層的な行動として表れやすい側面—を反映しているということは、ロールシャッハ法とハンドテストを比較検討することで、患者を重層的な視点から理解することができることを意味している。たとえば、ロールシャッハ法では、主観的で現実検討の低い反応を出した被検者が、ハンドテストでは卒のない標準的な反応を出すことも当然想定されるのである。この被検者は、内的世界では様々なファンタジーを体験していると考えられるが、それが直ちに現実世界に反映されるのではなく、現実（外的世界）との交流においては、常識的・慣習的な日常的行動を遂行することができていることを意味しているといえよう。しかしながら、明らかに内的世界が精神病的な色彩によって占められている場合は、当然FSの機能は妨害され、現実との関係も精神病的な色合いをもつことになるであろう。こうした被検者は、ロールシャッハ法においてもハンドテストにおいても、精神病的な反応が明らかであると考えられる。また、基本的な心的機能の低下した被検者の場合は、ロールシャッハ法においてもハンドテストにおいても、反応数の乏しい貧困なプロトコルとなると考えられ、この被検者は現実とのコンタクトも不十分であり、内的世界も荒廃したものとなっていると考えられる。

このように、ハンドテストはFSに焦点を当てた検査ではあるが、他の検査による十分な裏付けが得られることで、ISとFSの関係を予測する重要な情報も提供できると考えられる。そこで、構造分析の枠でハンドテストとロールシャッハ法がどのように統合解釈でき、被検者の全人格理解へとつなげることができるか、摂食障害事例を取り上げて検討することにしたい。

取り上げた事例は、まじめな優等生が自らの情緒的体験の処理に破綻し、現実適応を失った標準的な摂食障害患者である。彼女のロールシャッハ法は、観念的な反応に終始し、繊細な情緒的体験の乏しい内容であったが、基本的な現実検討力は保たれていた。ハンドテストにおいても、彼女の基本的な現実接触は維持されてはいたが、非常に偏ったものであり、幅の狭い行動傾向となっていた。これは、被検者が基本的には何とか現実と関係することができている（未熟ではあるがFS機能は保たれている）ものの、非常に観念的な深みのない内的世界しか形成できておらず（貧弱なIS）、融通性がなく、限られた行動パターンしか学習できていないことを示していると考えられ、これが被検者の病理を深めているといえるものであった。以下に、本被検者のハンドテストとロールシャッハ法の解釈、および構造分析による理解を詳しく検討したい。

Ⅲ. 症 例

(1) 事例概要

1) 被検者²

B 子 (22 歳) 女性 無職

2) 問題あるいは主訴

- a. 拒食・過食嘔吐による極度の痩せ
- b. 母親へのしがみつきによるコントロール

3) 生育歴及び問題の経過

B 子は、知的で厳格な両親のもと、世話をかけない「良い子」として成長した。小学生の頃から父親の仕事の関係で転校を繰り返し、その度に「新しい土地での新しい価値観に馴染むのに苦労した」らしく、そのせいか現在まで友人らしい友人は一人もいないという。そんな B 子が内心頼りにしていたのはどちらかというと父親で、母親は B 子にとって淡泊で影の薄い存在だったようである。しかしながら、高校に行くまでは特に問題なく過ごしていた。

高校入学後、ついに父親が単身赴任となり、B 子は母親の愚痴聞き役のような状態となった。その頃、好奇心で始めたダイエットが次第にエスカレートし、そのうちにほとんど食事を摂らなくなってしまった。急激な体重減少があったため、近くの心療内科を受診、数ヶ月間入院して体重は回復したが、その後、過食嘔吐をするようになってしまう。通院治療を続けたが症状は一進一退であった。学校にはほとんど通うことはできなかったが、勉強だけは頑張っ

て続け、大学受験もなんとかこなして無事地元の大学に合格した。しかし、結局通うことはできず、数日で退学してしまった。

それからは、拒食・過食嘔吐を繰り返し、心配する母親を振り回しては、すべてを母親に責任転嫁して、母親なしでは何もできない状態で過ごした。外来治療も受けず、ほとんど外出もしない生活を 3 年過ごしたが、その間に少しずつ落ち着き、母親が仲介役となって、新しい主治医と手紙によるつながりを持つようになった。今回、父親の転勤先に母親も引っ越すことになったため、“これを機会に自立を”と勧められ、本人も決心して入院治療となった。

2 本事例は、日本ロールシャッハ学会第 3 回大会 (佐々木, 1999) で発表された。事例の概要については、本研究において必ずしも必要と思われる情報は、プライバシー保護のため省略した。

4) 臨床像

一見して知的な優等生といった印象である。表情なく、淡々と常識的な受け答えをする様子からは、どこか冷たく孤高を良しとするような雰囲気を感じさせる。心理検査には拒否的ではないが、どこか警戒的であった。

(2) ハンドテストの解釈

ハンドテストのプロトコルおよび集約スコアを Tab. 1 「B 子のハンドテスト・プロトコルと集約スコア」に示した。

1) 形式分析

①集約スコア³の解釈

総反応数 $R = 11$ と非常に少ない（日本人成人の平均値 $R = 18.41$ ）。基本的な活動性・心理的エネルギーが低下した状態にあることが窺える。体験比率（ $\Sigma INT : \Sigma ENV : \Sigma MAL : \Sigma WITH = 5 : 2 : 3 : 1$ ）からも、全体の 90% を超えるとされる INT [対人] 反応 + ENV [環境] 反応の割合が 64% に留まっており、その分、神経症傾向を示すとされる MAL [不適応] 反応や、病理的な指標とされる $WITH$ [撤退] 反応が出現し、 $PATH$ (病理) スコア ($PATH = 5$) が非常に高くなっている（日本人成人の平均値 $PATH = 2.12$ ）。被検者の基本的な体験様式が、何らかの理由によって制限されているといえよう。

このことは、 INT [対人] 反応と ENV [環境] 反応のバランスの悪さからも窺える。B 子は日常的な活動や生活役割に対する関心が低く、環境と機能的に関われていない。そのため、 INT [対人] 反応はファンタジーの世界に留まったものであり、B 子が願望充足的に他者から受容されるエピソードを反応として出したことが了解される。実際 B 子は、病棟において看護者との依存的関係に固執し、その破綻に際して非常に感情的に反応したことが報告されている。

以上のことから、B 子は一貫して自己の問題を呈示するような反応を出していたと考えられる。従って、本検査のプロトコルは B 子の臨床像と非常に一致したものである。しかしこれは、ある意味で彼女の力でもあるといえるのではな

3 ハンドテストでは、すべての反応は 15 個の量的スコアリングのどれかに分類される。それらは各カテゴリーごとに集計されたあと、様々な比率や集約スコアが算出され解釈に用いられる。集約スコアは、① ER (体験比率) : 基本的な心理的エネルギーの配分傾向、② AOR (行動化比率) : 反社会的な行動が発現される可能性、③ $PATH$ (病理スコア) : 病理性の指標、④ $AIRT$ (平均初発反応時間)、⑤ $H-L$ (初発反応時間差) の 5 つからなる。

Tab.1 B子のハンドテスト・プロトコルと集約スコア

			Scoring	
No.	Time	Responses	Quantitative	Qualitative
I	3"△	待った (D) (他に?) 来るのかな、拒否してる感じ、相手を。ストップとかそんな感じかな。	DIR	
II	4"△	ん〜、苦しい、助けてくれ〜、死にそうだからって (笑い) 感じ。息ができない〜とか、苦しんで助けを求めているんだけど、届かない。悶えてる。あえぎ苦しんでいる。	FEAR (DEP)	
III	6"△	あそこにありますよって感じかな。(Q)何か、道を聞かれて、知らない人と知らない人が会話してる。どこか聞かれて、あっちですよ。あっちにありますよって感じ。	COM	
IV	7"△	何かね、最初、お父さんの手って感じだったの。お父さんの手としか思えない。動作っていうよりも、お父さんの手が映ってる。たまたま映ってる。暖かみを感じる。何か頭をよしよししてる感じにも見えるかな。よく頑張ったな〜って感じかな。(Q) 自分を。	DES AFF (DEP)	IM
V	10"△	何だこれ。こうやってる?何っていうよりも、若い女の子の手。遊んでる女の子の手。だれてる感じ。だらしのない感じ。ソファか何かにだらんと手をかけてる。	PAS	
VI	7"△	何かね、負けそうだから、でも、負けたくないから、無理して頑張ってますって感じかな。(Q)頑張って、握りしめてないと、負けちゃいそうな感じ。やられるじゃないけど、このポーズしてないと、意思が崩れちゃいそうな感じ。	TEN	
VII	3"△	これはもう、お母さんの手って思った。私を優しくこう、足とか体をやさしく撫でてくれてる感じ。(Q)眠りなさい、お休みなさい、よしよし、ゆっくり寝ていいよって感じ。	DEP	IM SEN
VIII	6"△	何か、この手の持ち主は悪い人で、ちって感じ。何か盗もうとしてる?盗もうとしてる。悪徳で、それで全国を回ってる。慣れた手つき、宝石とか、さりげなく盗む感じ。	ACT	
IX	4"△	あの〜サスペンスとかで、担架にのせられた死体。死体の上にかぶせるカバーから出ている垂れた手。死人の手。真っ青で、血が通ってないって感じ。	CRIP	INA
X	8"△	なんでもいい?こうやって (D) 愛をちょうだいって感じ。両手が見える。両手で一生懸命、愛をちょうだいって。	DEP	
AFF=1 ACQ=0 TEN=1 DES=1 R=11				
DEP=2(2) ACT=1 CRIP=1 BIZ=0 AIRT=5.8"				
COM=1 PAS=1 FEAR=1 FAIL=0 H-L=7"				
EXH=0				

だろうか。つまり、B子は自分を他者にどう見せるかをコントロールしていると考えられるのである。確かに環境と機能的に関わることはできていないが、彼女は基本的には環境との関わりを維持できているのである。このことは、AIRT（平均初発反応時間） $AIRT = 5.8''$ 、やH-L（初発反応時間差） $H-L = 7''$ が安定していることにも表れている。B子は図版の刺激によって自己の問題を呈示するような反応を出しながらも、一定のペースで反応を出せているのである。言い換えるならば、環境に対して非機能的な体験様式しか持っていないものの、基本的な環境との関わりを成立させているのである。

②量的スコア・質的スコアの解釈

まず、INT [対人] 反応からみていくと、最も多くなるCOM（（伝達））反応が1個と少なく、1個のAFF（（親愛））反応はIM《未熟》を伴った反応である。DEP（（依存））反応も2個と多く出ているなど、対人反応が全般に未熟で一方通行的なものに偏っている。先に述べたように対人反応が被検者の願望充足的なものとなっていることが、サブカテゴリーからも指摘される。また、環境 [ENV] 反応は、ACT（（活動））反応とPAS（（受動））反応が1個ずつである。総反応数が少ない上に、2個のENV [環境] 反応の内の1個がPAS反応であるということは、やはりB子の環境への働きかけが非常に消極的なものであることが指摘されよう。

B子のハンドテスト結果で、最も問題となるのはMAL [不適応] 反応の多さである。TEN（（緊張））反応、CRIP（（不自由））反応、FEAR（（恐怖））反応がそれぞれ1つずつ出ており（日本人平均TEN = 0.84, CRIP = 0.44, FEAR = 0.23）、B子が多様な心理的不適応感を体験していることが指摘される。緊張反応は、心理的な葛藤や、外的なストレスによる心理的エネルギーの浪費を反映する反応であり、VIカードの「負けそうだから、でも、負けたくないから」という反応は、まさにB子の心境そのものであろう。また、不自由反応は、「被検者が自分自身の心理的な機能不全や無力感を手に投影したもの」「多様なタイプの劣等性（たとえば知的、情緒的、身体的な）や、いろいろな程度の無力感（たとえば関節炎の手から死人の手まで）を表しているかもしれない」とされる反応であり、B子のIXカード「担架にのせられた死体」、また、FEAR（（恐怖））反応ではあるが、IIカード「苦しい、助けてくれ～、死にそうであ～」は、まさしく彼女の強い無力感を表していると思われる。被検者にとって自己は、能動的に環境に働きかけることのできない無力な存在として位置づけられているのであろう。このことは、Lenihan & Kirk (1990) が摂食障害患者のハンドテ

スト反応の特徴として、過食を伴うグループにおいて、“無力で受動的”な反応が特徴的であるとしていることと共通すると考えられる。

これは、「意味のある効果的な生活役割の放棄」を意味する1個のWITH〔撤退〕反応にも象徴されている。ただし、被検者の反応はDES（（記述））反応で、撤退反応の中でも最も安全な反応である。また、「お父さんの手。暖かみを感じる」と感情を伴ったものであることから、知的な防衛によるものであることが指摘され、B子が環境と積極的に関わることを知性化によって回避していることが推測される。このようにB子のハンドテスト反応には、環境に対して無力で非機能的な自己と、知性化と依存による防衛といった、彼女独自の体験様式が明確に反映されている。これは、B子が活発に防衛スタイルを活用できていることを意味しており、B子の基本的な力（FS機能）でもあるといえよう。

2) 継列分析

【Ⅰカード】

3秒と短時間で標準的なDIR（（指示））反応を出している。新奇場面において一般的な対応ができており、被検者の基本的な環境への対処力が窺える。ただし、微妙に内容が変容して「待った」から「拒否してる感じ」になっており、B子が検査そのものに対して非常に脅威を抱いていた可能性、新奇場面における不安、抵抗感が窺える。一見、孤高を良しとするような人を寄せ付けない臨床像と非常に一致した反応である。

【Ⅱカード】

「苦しい～、助けてくれ～、死にそうであって。（略）悶えてる。あえぎ苦しんでいる」と情緒的なFEAR（（恐怖））反応を出している。このカードは「神経症的な傾向として解釈される驚きや恐怖を引き起こす」とされており、被検者がこのカードの緊張感のある刺激にショックを受けたことが窺える。しかしながら、4秒と初発反応時間に遅れはなく、また、「苦しんで助けを求めている」とDEP（（依存））反応の要素も含んでいるなど、被検者なりの対処はできているようである。拒食・過食の症状によって母親に依存している今の被検者の臨床像を彷彿とさせる反応である。

【Ⅲカード】

構造化された無害で反応のしやすいカードである。これまでよりは若干時間がかかって、6秒で典型的なCOM（（伝達））反応（「あそこにありますよって感じかな」）を出している。Ⅱカードのショックが若干残っていたとも考えられ

るが、唯一の伝達反応をきちんとこのカードで出せていること、また、この後のカードにおいても、どれもカードプル⁴とも言えるスコアの反応を出せていることなどから、基本的には常識的な対処が十分可能な人であるといえよう。しかし、総反応数が少なく、1つの見方でしか反応していないことを考えると、環境依存的な反応様式しかとれないという、単純で未熟な反応様式の表れでもあると考えられる。

【IVカード】

7秒と若干遅れて、「何かね、最初、お父さんの手って感じだったの。お父さんの手としか思えない。」とDES（(記述)）反応となっている。しかし、「暖かみを感じる」と情緒的内容に言及しており、知的な防衛を感じさせる反応である。このカードは「被検者の生活役割の、よりユニークで個人的な特性が表れやすい」とされ、「象徴的には『父親カード』といわれる」ことから、まさしく被検者の父親との関係性が刺激されたようである。内心は父親を頼りにしていたというが、反応は動作を否定したものであり、生活役割の放棄、つまりは関係性の否認・抑圧を窺わせるものである。しかし、その後「頭をよしよししてる感じにも見えるかな」と自分を“よしよし”してくれる手を見ており、非常に主観的な反応となっている。AFF（(親愛)）反応ではあるが、無条件に自分を受け入れてくれる対象として、一方的な願望充足的反応となっている。関係性の否認・抑圧→一方的な願望充足的関係といった反応の流れを考えると、現実の父親との関係性が決して十分なものであるとはいいがたいと思われる。

【Vカード】

10秒と最も遅れてPAS（(受動)）反応を出している。カードプルとしては珍しくない反応であるが、「若い女の人の手。遊んでる女の人の手。だれてる感じ。だらしない感じ」と情緒的には性的なニュアンス、蔑視的なトーンが含まれ、非常に被検者特有のものを感ぜさせる。このカードの無力な刺激による影響でもあると考えられるが、被検者自身が若い女性であることを考慮すると、自己の女性性に対する独特の構えが見て取れるのではなかろうか。

【VIカード】

「負けそうだから、でも、負けたくないから、無理して頑張ってますって感

4 ハンドテストは、9枚の手の絵と1枚の白紙カードからなるが、それぞれのカードは、描かれた手の性質やそのカードが何枚目に、どのカードの後に提示されるのかといった提示順序によって、そのカード特有の反応や感情が喚起されやすくなっていると考えられる。この現象をカードプル(Card Pull)という。

じかな」とTEN（（緊張））反応となっている。これは、山上（1998）が摂食障害群に特徴的な反応として提唱した、質的カテゴリーのFRU《フラストレーション》「努力をするが実らない挫折感や他者を受容せずまた受容もされない孤立感などフラストレーション状況を表す反応」に該当すると考えられる。AGG（（攻撃））反応が明らかなカードプルであるにもかかわらず、このカードに怒りや攻撃性を見ないで、「このポーズしてないと、意志が崩れちゃいそうな感じ」となっていることは、被検者が適切な自己主張を表出する体験様式を持っていないためといえるのかもしれない。無力な刺激のVカード、それとは正反対の刺激であるVIカード（佐々木、1999）と、主体性にまつわるこの2枚のカードにおいて、被検者にその未熟な体験の在りようが表れているようである。

【VIIカード】

3秒と非常に早い時間で「これはもう、お母さんの手って思った」とIVカードとのつながりを感じさせる反応を出している。しかも、今回は最初から「私を優しくこう、足とか体をやさしく撫でてくれてる感じ」と受容される願望を表明している。IVカードでも見られたが、“頭をよしよししてる”“足とか体を優しく撫でてくれてる”とリアルな身体接触に言及しており、依存願望の充足が非常に未熟なものであることを感じさせる。他者との関係において、こうした一方的な依存関係が被検者の行動パターンとなっていると考えられる。

【VIIIカード】

カードプルとされるACT（（活動））反応を出している。このカードは、非常に構造化された反応のしやすい刺激であるため、ある意味で単調な反応となり安いのであるが、被検者は「この手の持ち主は悪い人で、ちって感じ。何か盗もうとしている（略）慣れた手つき、宝石とか、さりげなく盗む感じ」とユニーク反応⁵とも言えるような恣意的な反応を出している。“悪い人、盗む、悪徳、さりげなく”といった表現は、行為の裏の悪意を意味しており、猜疑心、秘めた敵意、安心感のなさ、環境に対する不信感など、被検者の対人関係、生活役割における重要な意味を含んでいると思われる。

【IXカード】

4秒と比較的短時間で「担架にのせられた死体。死体の上にかぶせるカバー

5 ユニーク反応とは、「はっきりしたかたちで被検者のパーソナリティの興味深い面を映し出しているもの」であり、「被検者について何かを明らかにして、そのパーソナリティ像を完成させるもの」とされている。この反応は、「行動的、想像的、情動的、知的な要素を組み合わせたもの」であり、「一般に知性や深みや複雑さを前提として」生じるものである。

から出ている垂れた手。死人の手。真っ青で血が通ってない」と CRIP ((不自由)) 反応を出している。最も反応の難しいカードとされてはいるが、このカードの CRIP ((不自由)) 反応の出現率は、日本人一般成人で7%しかなく、しかも“死人の手”になってしまうなど、マイクロファクト反応⁶とも言えるような被検者の病理性を示唆する反応である。不自由反応は、心理的機能不全や無力感を反映しているとされているが、“真っ青で血が通ってない”といった生気のなさは、被検者が強い無力感を体験していることを感じさせる。被検者は、主体性をもって効果的に環境と関わるといった体験様式を形成できていないのではなかろうか。Ⅷカードからの継列を考えるならば、被検者は内にも外にも敵意を体験しており、そうした状況の中で自らの主体性を放棄せざるを得ない状態にあるとも考えられる。ただし、この反応は「サスペンス」の中のものとされ、INA《無生物》反応にすることで、防衛されている。B子が基本的には自らの問題を処理する力をもっているといえるであろう。

【Xカード】

「愛をちょうだいって感じ」と明らかな DEP ((依存)) 反応をこのブランクカードで出している。このカードの「意表を突いた挑戦にどのように反応するかには、馴染みのない状況を扱う能力、想像的能力を活用する能力が関わる」とされているが、被検者の反応は、Ⅳ・Ⅶカードで繰り返された願望充足的な依存関係がそのまま表現されている。B子は、こうした方法でしか問題解決をすることができないのであろう。また、あからさまな愛情要求は、これから始まる入院治療に対する被検者の基本的な態度・構えを象徴していると考えられ、B子のファサードとしての依存的態度をどのように扱うかが治療において重要なテーマとなると思われる。

3) まとめ

B子は自らの問題に対処すべく、活発に防衛機能を働かせており、しかもそれは環境との関わりを維持していることから、基本的なFS機能は十分保たれているようである。しかしながら、環境に対して主体的かつ効果的な体験様式を形成できていないため、結果としてB子は、自らの主体性を放棄し、無力で依存

6 マイクロファクト反応とは、「稀で、かなり病的な傾向を窺わせる反応」とされ、「被検者のパーソナリティの明らかな歪みと関わっており、この反応からその人の精神病理の性質について、かなり確かな診断をたてることができる」とされている。病理性を有している点で、ユニーク反応とは異なるが、両者の明確な区別は非常に難しいとされる。

的なFSに固執することになっている。このFSに固執する限りにおいて、B子の問題は維持されたままと考えられる。

(3) ロールシャッハ法の解釈

ロールシャッハ法のプロトコルを Tab.2 「B子のロールシャッハ・プロトコルと Summary Scoring Table」 に示した。

Tab.2 B子のロールシャッハ・プロトコルと Summary Scoring Table

I ①Λ 2" コウモリ。うん。		①→こう、翼じゃないけど、羽広げてるし。(どこまで?) 全部。1匹。(頭は?) こっち。(らしさ) ここの辺。
	(他には?) 何だろうなあ。	①コウモリ W FM± A P
②V	蛾とか。	②→蛾、かな? 今見るとあんまり見えない気がしてきた。やっぱ、コウモリのイメージが強い。Λこう見て、蛾。蛾だとこっちがメインの羽。こっち、コウモリ。こっちになると蛾に見える。こっちが顔。(特徴) 何か黒いし、汚なそうだし、点々点々って散ってる感じが、隣粉をまき散らしている感じ。
		②蛾 W FC'± A P
③V	兜?	③→これは、本当、戦国の武将とかがかぶってる感じの兜。一番偉い人がかぶってる。全体で。槍はないけど、武将が身につけるのが全部あって、これは兜。ここが頭になって。(一番偉い?) 強そう。威厳がありそう。(威厳?) この槍みたいな部分が。
	41" うん。それくらい。	③ 兜 W F± Weapon
II なんじゃこりゃ。		①→あ、これが羽ね。ここが下の方の羽。これが頭かな。触角とか、目とかの感じ。で毒って感じたのは赤い色。こっちの方が特に毒性っぽいと思う。赤が混ざってたりするのが、すごい毒性持ってる感じがした。
①V 3"	ん…何か、毒をもった蝶。毒性の蝶。	①蝶 W FC— A
②Λ	何か、火、火の真ん中、お祭、火祭みたいな。黒いのが人間に見えるかな。火を囲んでお祭りしてる感じ。	②→楽しいんだけど、何か、毎年恒例の昔から伝わる伝統のお祭。でも、好きでやってる。盆踊りみたいな感じ。違う国と思ったけど、そんな感じ。火を焚いて、これが手に見える。(火?) 全部。こっちも。いろんなところで火を焚いてる。(らしさ) 夜なのこれは、明かりは火だけ。いろんなところで火を焚いてる。周りにもっと焚いてる。たまたま二人だけ描いてあるだけで、もっと沢山の人がいる。村の、こじんまりしたお祭り。(手以外) こくら辺頭、足。(火?) 赤いからもあるけど、燃え具合。祭のための火。(特に?) ここに薪があって燃えてる感じ。
	69" それぐらいかな。はい。	②火祭り W M±, CF, m H, Fire

III①A	4"	これは…ちょっと痩せた人たちが何かバリ島とかで、ボンゴン、コンガかな、を叩いてお祭りみたいな、火を焚いて。	①→これが楽器。伝統的な太鼓みたいなやつ。これも火。集落みたいなところ。頭、体で足ね。(バリ島?)何かアフリカとかバリ島とか、あんまり衣裳身につけてない感じ、裸に近い感じ。もちろん夜。お祭り、火焚くから。周りにも人が居て、踊ったりしてる。	①火祭り W M ±, CF H, Fire, Music P
		あとは何だろう。ん…		
②V		あれ、血を流してる甲虫じゃないけど、昆虫?クワガタみたいな感じかな。	②→ここが赤いから血流してるかなと思ったけど、あんまり見えない。たまたま赤いから。本人は痛くもないし、死んでもいいない、元気。強い感じ。目で、体で、半分しか映ってない。クワガタ。槍じゃなくて、手って感じ。(強い?)一番強い。	②クワガタ W FC ± Ad, Bl
		それぐらいかな。		
③V		また、逆さまにしてもバリ島で火をおこしながら踊ってる人たちって感じもおきますね。	③→火焚いて、夜で、さっきと同じ人たちが、人は変わってるけど、同じ場。これも女性で、衣類身につけてない。頭で、腰。下はない。足が下にあるけど。手に見えて、腕で。両方とも同じポーズで踊ってるんだなって感じ。	③火祭り W M ±, CF Hd, Fire
	96"	それぐらい。こっちは思わない。		
IV①A	5"	何かね、悪のね大魔王みたい。一番偉い人みたいな感じ。何か、黒いマントかぶってる。	①→顔、小さいの顔。ここが目ね、この部分。あとは全部マント。黒いマント。ここら辺は風になびいてる。体はいっさい見えない、顔だけ。衿みたいになってる。(風?)マントがこう流れるのか、こうなったりしてるから。(魔王?)顔小さくて、黒いマント。威厳がある感じ。	①大魔王 W FC' ±, mF (H), Cg
	58"	それぐらいです。		
V①A	4"	うん、蛾ですね。蛾にしか見えない。蛾です。	①→単純に。でも、反対にすると、どっちが頭かわかんないけど。羽。多分こっちが頭ね。これしっぽ。	①蛾 W F ± A P
	32"			
VI①A	4"	ほお~。何か楽器?何だろ。モンゴル地方の琴みたいな。琵琶みたいな。バトウキンっていうのかな。ちょっとわからない。楽器です、とにかく。	①→琴みたいな。モンゴル地方にバトウキンっていうのを聞いたことある。何かそれをふっと思った。1本筋があって、ここが巻くっていうのか、弦が通ってる。これが弦の調節するところ。これはモンゴル地方の獣、驚か何かの羽を加工して、飾りとしてつけてる感じ。(羽?)ギザギサのところ。	①楽器 W F ± Music, Aobj
②A		あとは…何となく、下の方で、果物に見えるかな。リンゴっぽい感じ。	②→モンゴル部分を除いたら、リンゴを縦に切って、これが種。種がある。ここら辺が食べるとこ。形、変だけど。(らしさ)種、おいしそう。ジューシー。この辺が。	②果物 D Fc ± Food
③A		何だろう。はたき。こうパタパタやる。	③→パタパタやるね。ここはよくわからないけど、持つところに。はたきの部分。ぱたぱたやる。(?)毛糸じゃないけど、柔らかくて、まあいい。からませて挨をとるような。	③はたき W Fc ± Obj
	83"	うん、それくらい。		
VII①A	5"	うん、女の子が向かい合ってる。多分仲良く、姉妹かもしれない。	①→仲良しの二人だと思う。これがポニーテールに見える。髪、顔。体。上半身。手ね。スカート。で、同じポーズしてるし、ここが合わさってるから仲が良いのかなって。	①女の子 W M ± H, Cg P

②V うん、これはね、仲良しの女の子たちか、二人と一緒に仲良く、音楽に合わせて踊ってる感じ。

②→こっちが顔。よくわかんないけど、体ね。手なの。腰で、スカートになってて、これが足。片っぽ足で立ってて、踊ってる。こっちの方にもう一つの足があって。変なポーズ。一緒のポーズだし、ここが合わさってるから仲がいいのかなって。

66" そんなもんかな。はい。

②女の子 W M± H,Cg

VIII①A 7" う～ん、何だこれは。蟹。優しい蟹(笑)。自分が蟹さんなんで、何か親しみを覚えます。何だろ。

①→私、蟹座なんで、上は除いて、これが蟹さんの手ですね。甲羅ですね。(らしさ)これが、すごい手に見えるから。優しいって思ったのは、パステルカラーだから、優しいだろうなって親しみもっちゃった。蟹座だから。

①蟹 D FC± A

②A 下の方だけ見たら、ハイビスカスみたいな感じかな。

②→ここ除いて。一緒かな。ハイビスカスってこんな感じじゃないですか。色的にも花びら、これも。(蟹とは?)これ、絶対除いて。ハイビスカスは、緑っぽいのあるからなのかな。

②ハイビスカス D CF Pl.f P

③V お～こうやってみると、本当にお花ですね。華やかな花って感じ。

③→こっちから葉が生えて、はっぱね。緑色の。お花これも花びら。華やかな花。

60" うん、そのくらい。

③花 W FC± Pl.f P'

IX①A 11" う～ん、上の方は、火…ですね。

①→この色は炎?(色?)赤でもこれは違う。こっちが火なの。(らしさ)火花が散ってる炎の勢いのよさ。

①火 D CF,mF Fire

②V 木かな。うん。優しい木って感じ。

②→これは関係ない。幹ね。2本立ってるの。幹で茶色。ここがはっぱとか、密集してる。これもあってもいい。これは、他の木の葉が。メインは、木の部分。(優しい?)さっきの蟹と同じ。パステルカラーだから。緑色好きだし、きれいと思って。

53" うん、そのくらいです。

②木 D FC± Pl

X①A 17" う～ん(笑い)何だこれ。え…。一番最初に思ったのは、むちゃくちゃ。無秩序な世界って感じ。無政府状態

①→いろいろな色と形が様々。いろんな方向むいていて、訳分らない。(絵?)この次元の物でないもの。異次元のもので、空想と現実が入り交じって表れてる感じ。(何?)こんな人魂みたいな感じ。はっぱとか、花とか、いろいろ混じってる。

①無秩序 W CF Fantasy

②A 次に思ったのは、チャイナドレス着た女の人たち二人が何かしてるって感じ。

②→これ除いた状態。これ頭、赤いから、こうチャイナドレス、ここからおしり、膝で、足が長い人。向こう向いてる。何してるんだろうな。

②女 D M±,FC H,Cg

③A 外側の水色の2つが蜘蛛?昆虫っていうか、毒持った怖い怖い蜘蛛みたい。うん。

③→今は毒持っていないように見える。普通の蜘蛛さん。水色だけど蜘蛛さん。

③蜘蛛 D F/C± A

- ④V 何かすごい, う～ん, 毒性の花. すっごい毒持った花. ④→緑. はっぱのイメージ. 茎に見える. 花の部分かな. いろんな色. 毒々しい感じがした. (イメージ?) これは葉で, これは葉だな, 茎, 花びら.
④花 W CF Pl.f
- ⑤V あと, 何かこう, 顔にいろいろ塗った道化師. ピエロみたいな感じで, にこってしてる. でも仕事をしてにこっとしてる感じ. ⑤→ひっくり返したときに, そっち強く思った. 目ねこれが. ここに黄色塗ってる. こころ辺顔. イタリアの道路でみせるような, あんな感じのピエロ. 口笑ってるのね. これは, ボンボンか何かだと思う. こう, 輪投げか何か曲芸やるじゃないですか, あれの道化って感じ.
⑤道化 W M±, CF Hd, Cg
- ⑥A でも, これがゴキブリに見える. これとこれ. ⑥→ふっと見たら羽に, 気持ち悪いって思った. 2匹. 小さいけど気持ちが悪い. (らしさ) 足とか, 足の出方とか, こう最近見たんですよ. それに似てる.
⑥ゴキブリ D F± A

154"

Summary Scoring Table

R=26	W : D=19 : 7		M : FM=7 : 1
Rej(Rej/Fail)=0	W%=73%		F% / Σ F%=15%/85%
RT=1'11"	Dd%=27%		F+ % / Σ F+ %=75%/59%
RIT=7"	S%=0%		R+ %=50%
RIT(N.C)=4"	W : M=19 : 7		H%=31%
RIT(C.C)=10."	E.B	M : Σ C=7 : 9.25	A%=31%
Most Delayed X Card & Time 17"		FM+m : Fc+c+C'=2.5 : 4	At%=0%
Most Disliked Card II		VIII+IX+X/R%=42%	P(%)=5(19%)
	FC : CF+C=6.5 : 6		Content Range=9
	FC+CF+C : Fc+c+C'=12.5 : 4		Determinant Range=7

1) 形式分析

総反応数は適度な量 (R = 26) であり, 様々なものも見ている (Content Range = 9, Determinant Range = 7). 体験型も両向型 (M: Σ C = 7:9.25) で, 基本的なエネルギーは十分であり, 一定の内的資質をもった被験者である. 一般的な見方もできており (P = 5), 情緒的な影響を受けないで客観的に判断した場合

は現実検討も保たれている ($F + \% = 75\%$).

しかし、全体の形態水準は若干低く ($\Sigma F + \% = 59\%$), とりわけ色彩反応において著しく形態水準が低下していることから ($FC \pm = 1$), 適応的な内的資質とはなっておらず, むしろ, 運動 ($add.m = 3$), 色彩 ($FC + CF + C = 12.5$), 陰影 ($Fc + c + C' = 4$) とあらゆる刺激に反応し, 過敏で動揺しやすく, 情緒統制の低下した状態にあると考えられる. また, 年齢相応の生き生きとしたエネルギーそのものは乏しいことから ($FM = 1$), 観念活動のみ活発に働いている状態と考えられ ($M = 7$), 情緒的な動揺によって主観的で独善的な判断となりやすいことが指摘される. とりわけ, 形態質の低い材質反応や食物反応 ($Fc = 2$, $Food = 1$) などの存在を考えると, 愛情・依存欲求などの対人関係における繊細な情緒的体験が未発達であることが推測される.

2) 継列分析

【I カード】

2秒と短時間に平凡反応を2つ出せている. しかし, 詳しい説明はできず, 「コウモリ」「蛾」の違いも曖昧である. 情報を取り入れる際の慎重さに欠け, 全体的な印象によって軽率に動いてしまうようである. 最後の「兜」も形態は曖昧であり, 「一番強い, 偉い」印象が強調されている. 「汚い蛾」と「偉い兜」の対比は, 被験者の劣等感や罪悪感など超自我にまつわる葛藤を推測させる.

【II カード】

赤色刺激に対して「なんじゃこりゃ」と衝動的に反応するが, その直後に「毒を持った蝶」と知性化による防衛が試みられている. 続く「火祭り」も赤色刺激に強く引き付けられているにもかかわらず, 「楽しい」「伝統のお祭り」と観念的な意味づけが行われている. 衝動や攻撃性を刺激されると, 衝動的に反応してしまい, 観念でそれに蓋をするかのような動きが見て取れる.

【III カード】

最初に平凡反応の“人”を見ることができており, 基本的には常識的な見方, 捉え方ができる被験者である. しかしながら, 「さっきと人は変わってるけど, 同じ場面」と反応の結合が生じたり, 「血を流してるカブト虫」「本人は痛くもないし, 死んでもない. 元気」とするなど強引な説明がなされている. 自らの情緒的体験を吟味することなしに, 強引に観念的な防衛を試みている.

【IV カード】

「偉い」「強い」といったテーマが絶えず登場しており, このカードでその印

象が明確に言及されている。しかしその正体は、曖昧で漠然としており、体がマントで見えず、そのマントも風になびいている状態である。超自我が十分に内在化されておらず、劣等感や罪悪感といった感情体験を十分に内省することができないようである。

【Vカード】

単純な平凡反応を時間をかけずに出せている。刺激の少ない明確な環境では、落ち着いた対応も可能なようである。しかし、このように環境からの刺激によって反応が容易に変化してしまうことは、B子の基本的な環境への働き掛けが受身的で非意欲的であることを意味しているのであろう。

【VIカード】

第1反応では濃淡を取り入れず、形から外国の「楽器」を見ることに成功している。が、やはり濃淡刺激を無視することはできなかつたらしく、第2反応で「林檎を割った」断面を見ている。形態は曖昧なまま濃淡の印象のみで反応を産出していること、「おいしそう。ジューシー」と材質感が口唇的な感覚となっていることから、非常に未熟な依存性が露呈している。続く「はたき」では、濃淡刺激をやわらかい材質感として体験することはできているが、形態は曖昧で「埃をからませる」ものとなっている。対人交流において未熟な依存欲求のために関係が混乱してしまうことが危惧される。依存関係を形成すると自我境界が曖昧となり、無力感を体験してしまうのではなかろうか。

【VIIカード】

すぐに平凡反応の女の子を出している。第1・2反応の2つとも同じような内容であり、二者の交流が「仲良く」と強調され、「ここが合わさってるから」と強引な意味づけがなされている。平凡反応（もしくはその類似の反応）を短時間に出せるなど社会的な規範や要求は十分理解できてはいるが、単調な見方しかできておらず、豊かな反応となっていない。

【VIIIカード】

多色カードであるが、赤色に目が奪われたらしく「やさしい蟹」としている。濃淡を知性化によって「やさしい」と意味づけた上、「自分が蟹さんなんで」と強引な説明をしている。情緒的動揺を観念的に処理しようとしてしまうため、主観的で短絡的な自己関係づけとなっている。情緒的關係において他者の思惑を独善的に意味づけてしまうことが推測される。続く反応は2つとも「花」であり、情緒表現は直接的であるが、内容は単純で生産性のある内的な深まりとはなりにくいようである。

【IXカード】

最初に単純な「火」を出している。これまでのような観念的な防衛が多色カードのために十分機能しなかったのであろう。しかし、やはり第2反応では、攻撃性を否認するかのような「やさしい木」と知性化が行われている。これだけ強引に自己の内的体験を脚色しなければ表現できないのであろうか。

【Xカード】

最初に「無秩序な世界」と色彩に圧倒されている。しかし、すぐに部分に分けることで5個の明確な対象をみれている。これらは、「チャイナドレス」「毒をもった蜘蛛・花」「ピエロ」と知的な脚色が施された反応となっている。最初に情緒的な反応を出してしまい、それを観念的に蓋をするというパターンが繰り返されている。しかし、最後の「ゴキブリ」だけは十分な知性化が働かなかつたらしく、「気持ち悪い」と情緒的体験が露呈している。蔑視的内容であり、劣等感や罪悪感に関わるテーマに関しては、十分な防衛が働いていないようである。

3) まとめ

常識的なものの見方や考え方はできているため、基本的には社会適応的な対処行動は十分可能であり、FS機能は保たれているといえるであろう。にもかかわらず、情緒的体験を共有してもらおうとする未熟な依存的構えが先行し、衝動的に感情を出してしまい、機能的に環境と関わっていない（FSの機能不全）。その上、内的体験を十分に内在化したり、中和したりといったIS機能が未熟であるため、衝動や攻撃性、不安などを安心して表現することができないようである。結果的に情緒的体験を強引な意味づけによって脚色するといった防衛が行われている。また、劣等感や罪悪感など超自我にまつわる内的体験も十分に内省できないため、対等な対人関係を形成するのも非常に困難であろう。このように、B子は自らの感情体験を吟味する内的活動（IS機能）が非常に未熟である。しかし、それを補う形で観念的なISが形成されているため、豊かな内的世界となっておらず、自律したIS機能を維持できていないと考えられる。結果として、効果的に環境と関われないというFSの機能も不十分なものとなっている。

(4) ハンドテストとロールシャッハ法の統合解釈

B子のハンドテストからは、B子が外界に対して自らの主体性を放棄し、無力

で依存的な FS を形成していることが指摘され、ロールシャッハ法からは、未熟な IS を補うために観念的な IS が作られ、自律的な IS が形成されていないことが示された。しかし、どちらの検査からも、彼女が基本的な外界との接触を維持できており、環境に適応するための FS 機能を基本的には保っていることが窺えた。これは B 子の力でもあるが、逆にこの FS によって B 子の IS の問題が解決されないでいることになっていると考えられる。つまり、未熟な IS を補う形で、FS が過度に防衛活動を行っていると考えられるのである。B 子の IS は、ロールシャッハ法から指摘されたように、自己の情緒的体験を中和するような複雑で繊細な働きをしていない。そのため外界からの刺激を内界に取り入れ、豊かな情緒的体験へとつなげていくことも、また、内的体験を安心できる形で表現することもできないでいる。IS と FS がうまく交流できないでいるのである。これを補うために様々な努力が試みられている。

まず、IS においては、様々な情緒的体験を観念的、恣意的に意味づけることで脅威を回避する試み、一方で FS においては、自らの主体性を放棄して依存的・非能動的に環境と関わることで、処理できない内的体験を外的対象によって処理してもらおうとする試みである。こうして B 子は自らの内的体験（衝動や攻撃性）を中和したり、内省したりすることをせずに、衝動的に環境に対処しているため、結局内的体験を深めるという作業がなされないまま、IS の成長・発展を妨げるという悪循環に陥っているのである。

さらに、ハンドテストに表れていたように、B 子は他者に対して無力で依存的な自己しか提示することができないでいる。そのため、B 子自身もまた周りの重要な他者も、B 子が主体的に感情を処理するチャンスを奪っていると考えられる。B 子の FS が基本的には環境との関係を維持できているということは、彼女が基本的にはベースとなる心的資質を備えていることでもあるが、主体性を放棄した依存的な FS に彼女が固執する限り、IS の成長は促されないであろう。自らの情緒的体験を中和できないことは、B 子にとって自己を脅かすものが内的にも外的にも存在するという体験となっていると推測され、B 子が主体的な体験様式を獲得するのは非常に難しいと考えられる。しかしながら、観念的な IS と主体性を放棄した FS の存在を、B 子自身と周りの重要な援助者が十分に認識することで、IS 体験を活性化できる安定した対人関係を形成することができれば、B 子を援助する上で重要な環境が作られることになると考えられる。

IV. まとめ

新しい人格理論である構造分析について、その概要を紹介した。構造分析理論の特筆すべき点は、この理論が様々な心理検査法を人格の“レベル”に位置づけて理解することを可能にしている点である。そのため、本理論を用いることで、複数の心理検査法とりわけ投射法を統合的に解釈することが可能となる。このことは、単に無意識を捉える検査とされていた投射法を異なる視点から理解することを可能にし、より有用な投射法解釈及び心理アセスメントを促進するものと考えられる。

そこで、ある摂食障害女性の事例を取り上げ、彼女のハンドテストとロールシャッハ法が、構造分析によってどのように理解され、どのように統合されるかについて、その解釈例を示した。そこで明らかになったように、構造分析を用いてこの2つの投射法を解釈することで、それぞれの検査データがどのような意味をもつのか、また、被検者の人格像を描き出すためには、2つの検査結果の共通点・相違点をどのように統合することができるのかを明確に示すことができ、それぞれの検査結果を矛盾なく解釈することが可能であった。これは、クライアントの臨床像理解を促し、クライアントに対する具体的な治療アプローチを計画する上で重要な資料となることが期待される。今後、さらに様々な事例についての構造分析による理解の妥当性を検証し、また、事例の長期的な経過との関連についても検討を進めていくことで、構造分析を用いた臨床アセスメントの有用性を確認していく必要があると考えられる。

V. 文 献

- Greene, R. S. 1978 Study of structural Analysis: comparing differential diagnoses based on psychiatric evaluation, the MMPI, and structural analysis of the Hand Test and Rorschach. *Perceptual and Motor Skills*, 46, 503 - 511.
- 池田豊應 1995 臨床投射法入門 ナカニシヤ出版
- Lenihan, G. O. & Kirk, W. G. 1990 Personality characteristics of eating-disordered outpatients as measured by the Hand Test. *Journal of Personality Assessment*, 55, 350 - 361.
- Piotrowski, Z. A. 1957 *Perceptanalysis*. New York: Macmillan. [上芝功博訳]

1980 知覚分析. 新曜社.]

Rorschach, H. 1921 *Psychodiagnostik – Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungs- diagnostischen Experiments*. Deutenlassen von Zufallsformen: Hans Huber. [鈴木睦夫訳 1998 新・完訳 精神診断学. 金子書房.]

佐々木裕子 1999 摂食障害者の母親に対する依存と敵意—投影法バッテリー「ハンドテスト」と「ロールシャッハ法」による検討— 日本ロールシャッハ学会第3回大会(専修大学) 抄録集 32-33.

佐々木裕子 1999 日本におけるハンドテストのカード特性について 福岡教育大学紀要, 第48号, 第4分冊, 215-228.

佐々木裕子 2000 構造分析理論の紹介(1)—投映法検査「ハンドテスト」の解釈から— 静岡大学人文学部人文論集, 51 (2), 77-92.

Wagner, E. E. 1971 Structural Analysis: A theory of personality based on projective techniques. *Journal of Personality Assessment*, 35, 422-435.

Wagner, E. E. 1976 Personality dimensions measured by projective techniques: a formulation based on structural analysis. *Perceptual and Motor Skills*, 43, 247-253.

Wagner, E. E. 1983 *The Hand Test Manual Revised* 1983. Los Angeles, California: Western Psychological Services. [山上栄子・吉川眞理・佐々木裕子訳 2000 ハンドテスト・マニュアル. 誠信書房.]

山上栄子 1993 分裂病者における投影法についての一考察—風景構成法, ロールシャッハ, ハンドテストの有効性と限界— 日本芸術療法学会誌, 24, 30-39.

山上栄子 1998 ハンドテストの臨床的実際(2)—摂食障害群の特徴と事例による検討— 日本心理臨床学会第17回大会発表論文集, 448-449.